東日本家族応援プロジェクト in 福島 2020 リモート開催しました！

立命館大学大学院人間科学研究科教授　村本邦子

今年のプロジェクトの最終地である福島も、リモートでの開催となった。毎年現地でお世話になっているみなさまの暖かいご協力で、いつもにも増して充実したプログラムとなったことに感謝したい。みなさまとの関係は、私たちにとってまさに宝です。

例年、都合のつく院生たちは、プロジェクトより前に福島に入ってフィールドワークをするが、授業の関係で参加できない院生も多い。今年は ZOOM での開催だったので、都合のつかない院生も録画で参加することができたし、修了生や関係者の参加もあり、素晴らしいプログラムを多くの人と共有できてとても嬉しい。

福島の状況は相変わらず、いや、ますます厳しい。そんななかで、声を上げ、つながり、できることをコツコツ続けている人々には敬意を感じるばかりである。藍原さんが言うところの、グローバルヒバクシャの「連帯の公共圏」にささやかに連なることができたら、そして、一人でも多くの人に福島のことを知り、関心を持ってもらえたらと願う。

来年は、現地に行って、子どもたちとクリスマスカレンダーを作ったり、テーブルを囲んでみんなでわいわいおしゃべりしながら食事したりすることができたらいいなと思う。最終年をどのような形で着地させるのか、プロジェクト終了後、何をどんなふうにつなげていけるのか考えどころだ。今年のリモートには、たくさんのヒントが隠されているはずだ。

福島２０２０

立命館大学大学院人間科学研究科訪問教授　団士郎

すべてのプロジェクトが終わって二週間ほど。振り返ってあらためて今年２０２０年の開催が従来とは随分異なったものだったと思う。目に見えないコロナ禍の不安は、２０１１年原発事故後の放射能汚染不安と重なり、福島開催も特別なものに感じられた。

むろん一番の理由は、漫画展が初めての会場、椏久里珈琲で行なわれたことだ。場所が変わることで見てくださる客層が変わったのだろう。「こむこむ」での開催より、多少年代が上の方が多かったのか、たくさんいただいた感想にそんな雰囲気が感じられた。

そして印象として、「催し物展示を見た人」というより、「画廊にいらした方」の声に近い気がした。より作品の中味に接近し、自分に引き寄せた感想が述べられている。漫画家としてこれは嬉しいことだった。

初めて見た方の中から、自分たちの場所でも、こういう展示をしてみたいと声が上がったことも喜びだった。この事は２０２１年以降の漫画展の FUKUSHIMA との関わり方を指し示してくれているように思う。模索していた家族応援プロジェクト１０年を終えた後の在り方について、一つのプランだと感じた。zoom 開催の「漫画トーク」も、毎年ライブで行

なっていたのとは違った、２０２０年形式の繰り返しの難しさや面白さを感じた。
　プログラム全体は、木曜の夜のプロローグから日曜夕方の振り返りまで、例年以上に盛りだくさんなメニューだったが、どれも素晴らしく学ぶところが多かった。現地にいると逆に、なかなかすべてを把握し、参加するのは難しいが、zoom 開催はそれを容易にしてくれた。

福島のプロジェクト報告　by 福島プロジェクトメンバー

12 月 3 日（木）震災 10 年を経て 語り手：市澤秀耕氏＋市澤美由紀氏（極久里珈琲）

　市澤ご夫妻から震災からの経緯やその中で感じてきたことをお話頂きました。お話を聞き、震災や原発事故は大切なものをたくさん奪ったのだと改めて感じました。「娘さんのふるさとを失ったつらさ」や「ここ 3 年心の底から笑えない」というお話。「福島全体が悩みを色々抱えている」というお話や「自分が本当にお食事したり、おしゃべりしたりしたいと思う人と本当に会わなくなった」というお話。どれもとても心にくるものがありました。「そんなこと考えなくてよかったらいいんですけど…。それが悔しいですよね、やっぱり。」という言葉も忘れられません。10 年経っても震災の影響が続いている。いつまで被災者は色々な気持ちを抱えなくてはいけないのだろうと思うと、胸が痛くなりました。今回感じたことを忘れずに、これからも震災や復興について考え続けていきたいなと思いました。
　終了後に行われたアンケートでは以下のような感想が寄せられました。

・ひとつの画面からおふたり並んでお話しされている様子を見ることができて、それぞれを尊重され、歩んでこられた道が垣間見られたように感じました。
・年を経過する度 に心の復興があるのではなく、気持ちには変化があり、割り切れない複雑な思いを抱えて生活されているのが伝わってきました。
・原発事故が奪ったものはあまりに大きいと、改めて感じました。原発事故を我が事として考えていこうと思います。
・心の底から笑える状況ではないお話、娘さんの故郷を失う悔しさのお話をお聞きして、涙が止まりませんでした。辛い状況から前に進んでおられる事が伝わり、自分自身も前に進んでいく力を頂きました。
・10 年という年月の中、生活の変化、家族や友人、故郷への思いなど様々な情景が見えるように伝わってきました。被災された方にとっての本当の復興とはなんぞや。そんな本質を問いただすようなお話しだったと感じました。
・話を聞くことができて感謝しています。子と親との飯舘への思いの違いがとても印象的でした。数年ではなく数世代のスパン。われわれの証人役割もそのぐらいのスパンがいるのかもと思いました。

（担当：M1 若洲花菜翠）

12 月 5 日（土）　団士郎漫画トーク　語り手：団士郎氏（立命館大学客員教授）

むつから始まり、今回が 4 回目の漫画トークでした。次々に新しいものが作り出され、新しいものが求められる中、同じお話を聞くというのは新鮮でした。4 回目で初めて気づいた発見もあり、面白かったです。また、感想を語り合う時間や団先生のお話からは、自分の考えを見つめ直したり視野を広げたりすることが出来ました。

特に、「アースカラー」後の「人は前に戻ったりしない」という団先生のお話は、とても印象に残りました。「あんなことがなければ…」と考えても、前のような自分には戻らない。回復・克服したとしても、前の自分ではなく、それを乗り越えた自分になっている。戻るより、次の新たな自分に進むって考えることが出来る方が、人は自由だと思う。これらの言葉は、これからの自分を支えてくれるような気がします。今後は、「あんなことがなければ…」と思うようなことがあっても、それを乗り越え、「それでも私は進んでいっている」という感覚を持ちたいなと思いました。

終了後に行われたアンケートでは以下のような感想が寄せられました。

・友人に招待されて、初めてお話しを伺いました。何気なく過ぎていく日常の合間に、ちょっと立ち止まって自分の事や自分を取り巻く周りの事を見つめ直す事が大事だなと思いました。
・ご一緒させていただいた方と感想を共有できたこともよかったです。一人で夜空を見上げた日のこと、見上げる余裕もなかった日々のことを思い返しました。
・私自身、生き方についてぼんやりと悩んでいることもあって、今日のお話を聞いて少し心が軽くなりました。
・お話が、今とこれまでの自分の状況とぴたりと当てはまり、話を重ね合わせて聞かせ ていただきました。「人は刻々変わるもの」ということを改めて考えました。
・初めて参加させていただいて、このような形は初めてでしたが、とても良い機会を与えられました。極久里さんまで原画を見に行かれなくて残念です。 団先生の作品、是非拝見したいです。
・さまざまなヒントをいただき、そのことを心に置いて相談に乗っていきたいと思いました。少し気が楽になった気がして、同じ話を違う状況で聞いているとこんなふうに違って聞こえてくると気づきました。また、グループセッションの参加者の方からもとてもいいお話が聞けました。有難うございました。

（担当：M1 若洲花菜翠）

12月5日（土）　被災者支援９年のあゆみと残された課題
語り手：中鉢博之氏（特定非営利活動法人ビーンズふくしま　常務理事　事務局長）
　　小磯厚子氏（白河市つどいの広場事業　おひさまひろば　副代表）

NPO 法人ビーンズ福島の中鉢さんからは、今なお故郷に戻っていない人がたくさんいるという現実から避難生活の厳しさ、仮設住宅で暮らす子どもたちの不自由さ、転校による影響、母子避難によるさまざまな問題などが語られ、現在も支援を必要とする状況で、それぞれの地域で子ども、母子、高齢者を支援する取り組みについてお話くださった。小磯さんからは、福島で暮らす母親にとって放射線は「忘れさせてもらえない存在」という言葉が印象的で、安心して悩みを話せる場「ままカフェ」でのエピソードもお話してくださった。コロナの影響は震災当時の窮屈さを思い出すという人の言葉から少しは理解できた部分も。そうした中でも試行錯誤され支援し続ける強さを見習いたい。

終了後に行われたアンケートでは以下のような感想が寄せられた。

・「これから福島の子どもたちに何を届けたらいいのか」ということばを反芻しています。誰かと一緒に感じることのできる場は、どんな場所でも必要だなあと感じるお話しでした。
・実際に福島で支援をやってこられている方々のお話を聴いて、福島の現状を知ることができました。
・ひとりひとりの思いを大切にできる場所であり、支えとなる場所があるというだけで救われる方は多いと思います。コロナ禍で大変だと思いますが続けてほしいと思いました。
・福島での子どもの様子や具体的な支援をしることができたこと、さらにコンゴの課題も聞くことができ、自分自身、何ができるかと考える機会となった。
・福島の復興は、まだ他の被災地に比べて遅れていると仰っていましたが、毎年聞かせていただく度に現状を知ることの大切さを思います。とりわけ、「ママカフェ」は、「お母さん方とって大変有難い場だ」と子育て支援をしている私は思いました。
・毎年素敵なおもちゃを見せてくださる小磯さん、いつも笑顔でしっかりとした声の張りから前向きな思いが伝わって元気をいただきます。(中略)「忘れずに福島と関わってくださることが嬉しい」と仰っていましたが、「忘れないこと」、「一緒に考えること」をこれからも心に置いて震災プロジェクトに参加させていただきたいと思います。
・とてもよい企画だと思います。福島の課題を福島の方たちだけに背負わすのではなく、我が事として考えていこうと 思います。

（担当：Ｍ１前田留里）

12 月 6 日（日） 双葉を追われて
語り手：目黒とみ子氏（宮城民話の会/原子力災害伝承館語り部）

双葉町の昔ばなし「こたろうきつね」から目黒とみ子さんの語りは始まりました。狐の子「こたろう」と育てた母狐の切ない別れのお話、それは突然の災害によって促されるがまま双葉町から離れなければならなかった双葉町の方々の姿と重なりました。さらに目黒さんの語りは東日本大震災での大変だった話へと続きました。転々とした避難生活が続く中、大変だったのは「人のお世話になること」。その言葉は目黒さんの淡々とした口調とはかけ離れ、予想もしない出来事によってもたらされた人々の運命を表現していました。

参加者アンケートには、次のように多くの感想が寄せられました。

・伝承者の語りを通し、当時の状況が目の前に浮かび上がり、涙が止まらず、心が揺さぶられました。
・自分自身の知らないことについて知ることができ、語り手の方から聞くことでさまざまな思いが胸に残りました。また、自分自身の知識の少なさを痛感することができました。
・語りの内容も、語り方も　非常に伝わるものがあった。語り方に関しても特に私たち世代が忘れていた言葉のまっすぐさ、淡々と伝える決意も感じられた。
・実際に避難されている方の語りを聴く機会はほとんどなく、とても貴重なお話を聴かせていただきました。
・語り手の話は情景がうかぶような臨場感で、写真を元にしたお話しからは当時の様子がありありと分かり、リモートながら語り直接聞いたような気になりました。
・事実の生の語りがこんなにもすごい力を持っていることを初めて知りました。事実もすさまじいものでしたが、人の魂を揺さぶるような語りでした。
・加藤さん、目黒さんの存在感。とてもよかったです。
・貴重なお話を聴かせていただき、ありがとうございました。原発事故を福島だけの問題にとどめず、我が事として考えていきます。どうかお身体にお気をつけください。
・ある日突然、今まで刻んできた歴史が絶たれ、故郷が無残に変化し、家族がバラバラになり、新天地で生きていかざるをえないという生活がどんなことなのか、語りの中で知り、心が痛くなりました。しかし同時に知らなければならないことだと思いました。ありがとうございました。どうぞお体に気をつけて、今後も語り継いでくださいませ。

（担当：D 生 服部紀代）

12 月 6 日（日）　福島第一原発事故に関する伝承施設の展示内容の特徴
講師：後藤忍氏（福島大学准教授）

福島のプログラムでは、一昨年から福島大学大学院の後藤忍先生をお訪ねしている。例年、早目に現地へ向かうことのできる者しか、後藤先生のお話を聴けないのだが、今年はリモート開催のおかげで、より多くの参加者が聴くことができた。

後藤先生は、9 月に双葉町に新しくできた「東日本大震災・原子力災害伝承館」の展示について、定性的な指摘と定量的分析（分析は途中段階のもの）をお話された。実際の展示の写真や展示の説明文を紹介し、その上で展示の課題を指摘されていた。たとえば、福島県自らが原発事故の責任を自分事としてとらえる説明が抜けている、健康調査の甲状腺がんの結果が展示されていない、事故前に原発の安全性が強調されていたことへ触れていない、展示の選別基準が不透明である等々、たくさんの大事な視点を挙げられていた。また、展示の定量的分析では、「避難」が一番多く使われていて、「事故」「原発事故」等の否定語が上位に入り、「復興」も多く使われている一方で、「汚染」が上位 150 語の中に入っていなかったとのことである。「汚染」は福島の復興を語る上でマイナスなのだろうと推察されていた。

東日本大震災と原発事故から 10 年が経とうとしており、原発事故の風化は免れないことを考えれば、伝承館は原発事故の教訓を伝える重要な施設である。後藤先生のお話を聴くと、その伝承館にまだまだ改善すべき点が多いことが理解できた。メディアでも取り上げられているように、事故前の原発推進看板については、標語を考えたご本人が実物展示を希望しているにもかかわらず、大型写真の展示に至っている。実物が語る力は、写真よりもはるかに大きい。このような住民の声に耳を傾け、展示に反映していくことができないものだろうか。私たちは今年のプロジェクトで、故郷を追われた方たちのお話を聴いてきた。今も苦しんでおられる方たちの声は、私たちに言葉を失わせ、苦しみを分け与えられたかのような体験でもあった。原発事故は自然災害ではない。その苦しみはこんなにも長期に続くのだと、私たちは強く感じた。そのような苦しみの分有を、伝承館で経験することができれば、来館者も原発事故を自分事としてとらえることができるのかもしれない。開館からまだ数カ月しか経っていない伝承館が、どのように展示内容を変えていくのか、むしろ今後の経過を注視していかないといけない。後藤先生のお話は、原発事故を扱う伝承施設に対して、私たちにとても重要な視点をもたらしてくれた。それは、原発事故をけっして風化させないことにつながると思う。

終了後のアンケートでは「福島の伝承施設をチェルノブイリのような物に語らせる施設、悲惨さを伝えていく施設にしていく必要があると感じた」「後藤先生が信念をもって丁寧に調べられた検証のお話をお聞きすることができ、大変勉強になった」「教訓を継承するための施設と思っていたが、疑問の残る点が多くあることをよく知ることができた」「自分がどんな立ち位置で物事を見ていくのかを考えさせられた」「原発の課題が山積みであることを再認識できた」等々、様々な感想が挙げられた。　　（担当：D 生 河野暁子）

12月6日（日）　フクシマとグローバルヒバクシャをつなぐ
講師：藍原寛子氏（フリージャーナリスト）

藍原さんの話を聞いて、私たちが今までの人生においてどのように原発と繋いでいるのかを思い出しました。原子力発電所の交付金を話すと小声になる子供たち、原発事故が起こった後、他のヒバクシャのことを知りたがる福島県民たちについて、彼らの気持ちに共感できるようになりました。我々が持っている原子力発電所に関する知識は如何に間違っているか疑問を抱くようになりました。そして、その間違いを基に生じた無関心に対して、申し訳ない気持ちもあります。原発問題の複雑さは、現在の福島における復興だけではなく、時間・空間を越え世界各地と関わっている事だと実感しました。

藍原さんをはじめ、福島のヒバクシャとグローバルヒバクシャとの繋がりについて、嬉しい半面、悲しくもありました。嬉しいのは、世界各地に協力できる仲間が多くおり、彼らの経験をもとに学習することが可能です。手法は異なるが、各地のヒバクシャの活動は大きな影響をもたらしました。一方で、悲しいのは、各地で起こった事故は類似しているようです。原子力発電所に関する安全神話、解決不能な事故、一瞬にして崩れた日常、病気の脅威と不安、事実を隠した有権者、矮小化した被害状況など、事態は繰り返しており、マーシャル諸島共和国元外務大臣トニー・デブルムの予言「(加害者は)嘘をつき(LIE)、否定し(DENY)、機密扱い(CLASSIFIED)にする。フクシマでも同じことが起きるだろう」通りになりました。それに対して、私たちは誰でも自分の日常生活に協力できる「抵抗の公共圏」、つまり放射能の測定や資料収集、デモや集会、勉強会など非暴力で、何ら規約も規則も会費も伴わない活動がより大切になりました。真実を共有し、記憶し、伝えることは辛くて孤独の時もありますが、真実を知らずに麻痺状態である過去を変えて生きたいです。

終了後に行われたアンケートでは以下のような感想が寄せられました。

・とても貴重なお話でした。世界と福島がつながり、市民の手で未来を作っていける希望を持つことができました。
・とても丁寧なお話をありがとうございます。原発について、自分も声を上げて行動していこうと思います。
・お金や発展より大切なものがあり、誰にとっても故郷の家や景色が失われてることは辛いが失ってからわかるのは辛い。失わずにすむような道を世界中で考えたいと思いました。
・核被害者というくくりはその通りだと思う
・今回の藍原さんのお話を聞かせていただき、一市民の抵抗が人を、社会を変えることがあるんだということに希望に持ち、自分の活動を続けていきたいと思います。

（担当：D生 CHANG I-Chin）

福島のプログラムに参加して

福島のプロジェクトを通して

対人援助学領域 M1　若洲花菜翠

今回、福島のプログラムに参加して、福島の「震災当時のこと」「現在までのこと」「これからのこと」について学ぶことが出来ました。

まず、震災当時については、目黒さんの語りから多くのことを学ぶことが出来ました。頭で学んだと言うよりは、感覚として学んだという感じです。「こんなに恐ろしいことが起きたのか…」と、一言では表せない感情になり、言葉が出ませんでした。「避難で一番大変だったことは、人のお世話になること」という言葉も忘れられません。時間をおいて録画のものを再度見ましたが、今もまだ全てを受けとめきれていない気がします。それくらい恐ろしいことが起きたのだという事実と語りを聞いた際の感情を忘れずにいたいなと思いました。

次に、現在までのことは、極久里珈琲の市澤ご夫妻のお話やビーンズふくしまの中鉢さんのお話から学ぶことが出来ました。市澤さんご夫妻の「娘さんのふるさとを失ったつらさ」や「ここ 3 年心の底から笑えない」というお話は、とても心にくるものがありました。「そんなこと考えなくてよかったらいいんですけど…。それが悔しいですよね、やっぱり。」という言葉も忘れられません。メディアで福島を見る機会は減っていますが、震災の影響は今もなおあるのだと胸が痛くなりました。また、ビーンズふくしまの中鉢さんのお話では、予防・問題の早期発見の場、エンパワーメントの場の重要性を感じました。誰のせいでもないのに全ての人にしわ寄せがいき、地域や親がもっていた子どもを支える力が揺らいでしまう。そのような中で、「ままカフェ」はお母さん達にとってとても心強かったと思います。共感できる仲間と繋がれたり、デリケートな話を安心して出来たりすることは、本来自分がもっていた力を取り戻すことに繋がると思いました。

さらに、これからのことは、福島大学の後藤先生のお話やフリージャーナリストの藍原寛子さんのお話から感じることが出来ました。後藤先生のお話からは、伝承施設のこれからの姿について考えさせられました。「自分事」に出来ているのか。展示資料は適切なのか。展示資料に対する説明は十分なものなのか。今すぐは難しくても、今後チェルノブイリのような「体感レベルで訴える施設」「ものに語らせる施設」にしていく必要性があるのではないかと感じました。また、藍原寛子さんのお話では、「原発」は福島やチェルノブイリだけでなく世界の問題なのだと感じました。まだまだ課題は多くても、世界中に原発について考え行動されている方がいる。そう思うと、少し希望が持てた気がしました。今後、東北の農家の方とイギリスの農家の方が繋がったように、世界と繋がりながら原発について考えていけたらいいなと思いました。

プログラムにご協力いただいた皆様、貴重なお話を本当にありがとうございました。

「東日本・家族応援プロジェクト in 福島」に参加して

対人援助学領域　Ｍ１　前田留里

私にとって福島は縁のない土地でしたが、担当することで町の概要、震災、原発について様々な文献にあたり、今まで知らなかったことの多さに大きな衝撃を受けました。

同じ国で生活していた 10 年の間、こんなにも理不尽な生活を強いられている人々がいるのかと思うと憤りややるせなさを感じ、また一方でそれでも生活を取り戻すため助け合い生き抜く人々の姿や、危険を顧みず復興に向けて働く人々がいることで、人の強さも感じられました。

しかし実際に体験者の語りを聞くと、それ以上に苦悩の根深さ、復興までの道のりの遠さ、失ったものの大きさに、とても苦しい感情を抱きました。

亞久里珈琲の市澤夫妻のお話からは、転々とした避難生活、残してきた故郷への思い、怒りと悔しさで「笑ってないと生きていられなかった」と自分を奮い立たせるように生きてこられた生の声に胸が締め付けられた。また故郷では除染も進み農作業も再開されたが、体力的な衰えや後継者問題など、年月が経ったからこその問題を聞き、高齢化した被災者問題も難しいと感じました。

ビーンズふくしまの中鉢さん、小磯さんのお話からは、バラバラになった家族や友人たちの状況、子どもたちにとっての健康と転校の影響、母親たちの放射能への不安などが語られ、それぞれに必要な支援を工夫しながら各地で続けてこられた活動に感銘を受けました。

目黒とみ子さんの民話「こたろうぎつね」では山の不思議なお話にほっこりしたものの、その後の経験談では津波の前触れとされる奇妙な高積雲を描いた絵や震災後の町の写真を交えた語りに、緊急避難の混乱や震災の爪痕など臨場感のある被災された人々の声が伝わってきました。

後藤さんによる原子力災害伝承館の特徴では、復興を強調した内容で展示資料の選定など非公開な部分もあり、教訓を生かすという内容としては改善の余地があるというお話で、見えていないものに気づくことの重要性を感じました。

藍原さんの話からは世界の教訓から学び、事故をどう次の世代に活かしていくべきか、今なお日本で原発が稼働している現実を鑑み、ひとりひとりが考え行動することで、事故を教訓に変えていけるのだと、私たちへのエールでありメッセージだと感じました。

被災された方が「復興した」と言えるまで長い年月がかかると思いますが、それでも行動を起こしている人々がいることを知り、未来への希望につながったプロジェクトでした。

「東日本家族応援プロジェクト 2020 in 福島 リモート」に参加して

人間科学研究科 D1 服部紀代

私は今年度初めてこのプロジェクトに参加した。参加の動機は、東日本大震災発生から 9 年経過した今、被災地の方々が感じていることを知りたいと思ったからである。私は阪神淡路大震災に遭い、その当時の記憶は未だに大きな揺れを感じる度に想起され、25 年経ってもなお忘れられない記憶である。東日本大震災では地震のよる津波、そして終わりがみえない原発事故という未曽有の出来事が起こった。これまでの地震とは異なった。私にできること、それは被災地の方々の声に耳を傾け、一緒にその場に存在することだと思い、プロジェクトに参加した。

事前学習からさまざまな福島の姿を学び、私の知らないところで現在もなお、福島に住んでおられる方、県外に避難されている方と、多くの方が震災前、原発事故前とは大きく異なる生活を受け入れざる負えない状況を知った。プロジェクトではさまざまな立場から福島を見つめ、多角的な支援をされている方々のお話を伺った。特にみやぎ民話の会の目黒とみ子さんの語りは、参加した皆のこころを大きく揺さぶるもので、プロジェクトが終わってもなお、こころの中のもやもやした感情はそう簡単に治まるものではなかった。一定のリズムで語られる当時の様子は、その淡々とした語りとはかけ離れた壮絶な情景であった。民話の語りの大きな力を感じ、またこの語りを伝承していく重要性を強く感じた。

私たちはこの震災の現実をどのように受け止め、何を考えるのか。私たちは当時の出来事や教訓も含め、何を伝えていくのか…各々の置かれた環境で向き合い、他人事ではなく自分事として考え続ける必要がある。プロジェクトに参加し、私がどの視点で福島と向き合うのか、答えはそう簡単に出てこない。今後私が対人援助職として自身と他者に向き合いながら、その答えを考え続けたいと思う。

「東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 福島 リモート」に参加して

博士後期課程　CHANG I-Chin

三年目の福島プロジェクトが終わりました。何よりのは知り合った方々と会えて、再びに教えてもらうことであったが、初対面の目黒先生の話も心に深く残りました。コロナ禍で現地へ行けないのに、皆様とのご縁を改めて感じるようになりました。福島のために頑張っている皆様が持っている個人的な体験を聞くと、悲しく寂しい気持ちが溢れました。それに対して、皆様が諦めずに行動していることによって、尊敬すべきだと考えました。後藤先生が言った「福島原発事故を自分ごと化する」ことみたいに、社会問題において、我々が自分ごと化すべきことまだいっぱいあるではないかと思い出しました。プロジェクトの企画に参加した方々にお礼を伝えていきたいです。今年もお世話になりました。

「東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 福島 リモート」に参加して

博士後期課程　河野暁子

今年の福島プロジェクトは、現地に行くことができずリモート開催となったが、Zoom を使ってより多くの方々のお話を聴くことができた。飯舘村を離れて福島市で椏久里珈琲を営んでいる市澤ご夫妻、双葉町を追われて民話や語り部活動をされている目黒さんのお話は、聴いていて言葉を失うような語りであった。原発事故がもたらす苦しみはあまりに長く続き、いつになれば穏やかに暮らしていけるのか、語りを聴いた者の責任として、何ができるのかを考えさせられた。

支援活動を続けてこられているビーンズふくしまの中鉢さん、白河市つどいの広場の小磯さんのお話からは、9 年という長い経過の中での状況の変化を知ることができた。地域で分断や格差が生まれたり、心配事を自由に語れない雰囲気があったり、また賠償終了後の困窮の問題があったりと、課題は尽きることがないことがよく理解できた。

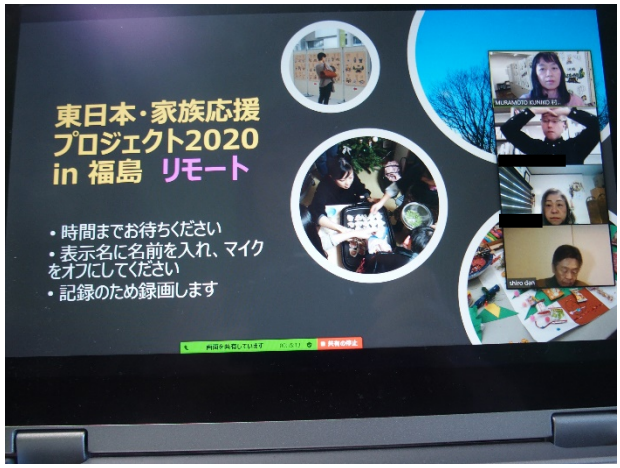
福島大学大学院の後藤先生のお話からは、原発事故を扱う伝承施設の展示が不十分であること、来館者が声を上げながらよりよい展示を作り上げていくことが大切だと学んだ。原発事故を風化させないためにも、私もこの姿勢を持ち続けていきたい。フリージャーナリストの藍原さんのお話は、原発の問題を核被害と位置づけ、世界中に点在するグローバルヒバクシャを結びつけていく視点であった。原発事故の課題を福島だけに留めておかない視点は、原発事故後に苦しんでいる方々を孤立させないためにも、とても重要なことだと思った。

本プロジェクトで毎年福島を訪れるたび、とても大きな衝撃を受ける。その衝撃も、日常の忙しさに埋もれて、いつしか薄まっていくことをこれまで経験してきた。福島に足を運び学んでいるにもかかわらず、その関心を維持し続けることが難しい。今年は腰を据え、私自身の行動をふり返り、思考を巡らす時間になった。

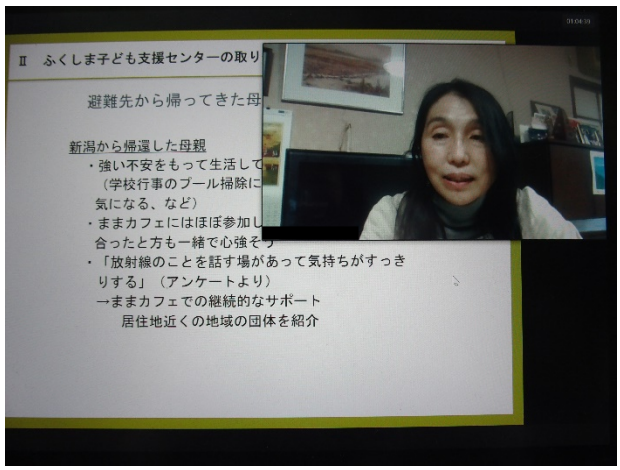
団先生の漫画トークで、人はささやかでも自分でできることがあり、変化を起こしていける、というお話が胸に響いた。この原子力災害に対して、私自身にできること、それがたとえ小さなことであっても続けていきたいと思う。

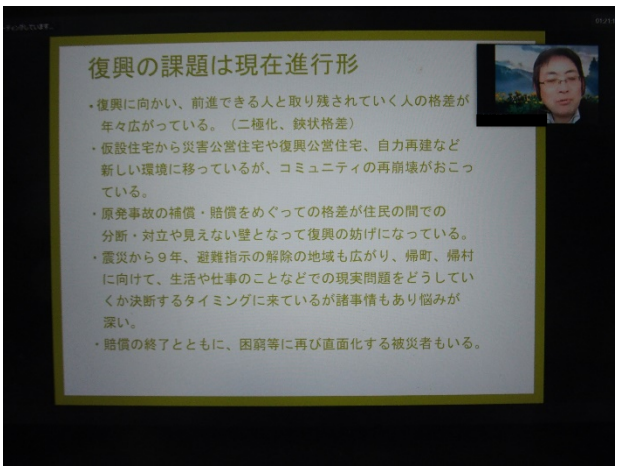
最後に、今回の福島プロジェクトでお世話になりましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

MURAMOTO KUNIKO 村本邦...
shiro dan

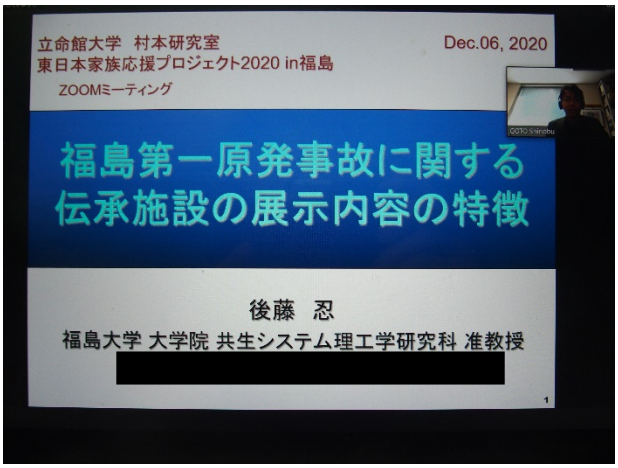

東日本・家族応援
プロジェクト2020
in 福島 リモート
• 時間までお待ちください
• 表示名に名前を入れ、マイクをオフにしてください
• 記録のため録画します

寝付けない大地の上で、
月明かりに揺れる枝や
葉陰ごしの満天の
星空を見る。
shiro dan


Ⅱ ふくしま子ども支援センターの取り
避難先から帰ってきた母
新潟から帰還した母親
・強い不安をもって生活して
（学校行事のプール掃除に
気になる、など）
・ままカフェにはほぼ参加し
合ったと方も一緒で心強そう
・「放射線のことを話す場があって気持ちがすっきりする」（アンケートより）
→ままカフェでの継続的なサポート
居住地近くの地域の団体を紹介


復興の課題は現在進行形
・復興に向かい、前進できる人と取り残されていく人の格差が年々広がっている。（二極化、鋏状格差）
・仮設住宅から災害公営住宅や復興公営住宅、自力再建など新しい環境に移っているが、コミュニティの再崩壊がおこっている。
・原発事故の補償・賠償をめぐっての格差が住民の間での分断・対立や見えない壁となって復興の妨げになっている。
・震災から９年、避難指示の解除の地域も広がり、帰町、帰村に向けて、生活や仕事のことなどでの現実問題をどうしていくか決断するタイミングに来ているが諸事情もあり悩みが深い。
・賠償の終了とともに、困窮等に再び直面化する被災者もいる。

[redacted]
すべてを検索


立命館大学　村本研究室
東日本家族応援プロジェクト2020 in福島
ZOOMミーティング
Dec.06, 2020
福島第一原発事故に関する
伝承施設の展示内容の特徴
後藤　忍
福島大学 大学院 共生システム理工学研究科 准教授
[redacted]
1

フクシマと
グローバルヒバクシャをつなぐ
2020年12月6日(日)14時30分～16時
ジャーナリスト　藍原寛子
[redacted]

東日本・家族応援プロジェクト 2020 in ふくしま　リモート

団士郎家族漫画展＆トーク

家族はたくさんの思いがけない悲しみや苦しみも運んできます。
しかし一方、家族を得ることが、こんなにも自分の人生を豊かにしてくれるのだと実感する人もたくさんいます。そんな家族への思いから作られた「木陰の物語」。
活動 10 年目を迎え、今年度は漫画展のみ福島市で開催し、トークは ZOOM によるオンラインとなります。
今の気持ちなどをお話したいと思います。お時間が合えば是非ご参加ください。

《団士郎プロフィール》
立命館大学大学院人間科学研究科客員教授
家族療法家・漫画家
公立の児童相談機関心理職 25 年を経て独立。「仕事場 D・A・N」主宰
漫画家でもあり、「かぞくのじかん」（婦人之友社）ほか数誌に「木陰の物語」連載中
マンガ集団「ぽむ」同人、web雑誌「対人援助マガジン」編集長

団士郎家族漫画展

会　期：11/21（土）～12/6（日）
場　所：極久里（アグリ）珈琲　福島店　2F

良いことだけが起こる人生も、悪いことだけが起こる人生もありません。運、不運、幸、不幸を、ないまぜにして誰もが生きています。ここに描かれた小さな物語はどれも実話で、何かを説明するために描いたものではありません。人は皆、毎日、様々な物語を紡ぎながら暮らしています。時はゆっくり前に進んでゆきます。人生は物語の花束のように思えます。ゆっくりご覧ください。

極久里珈琲
〒960-8071 福島市東中央 3 丁目 20-2
電話：024-563-7871
時間：9:30-18:30
※毎週火曜日と第一月曜日はお休み

MAP

団士郎漫画トーク

日　時：12/5（土）10:30～12:00
定　員：30 名　　参加費:無料

◆参加条件：Zoom を使ったオンラインでの開催となります
インターネット環境があり、パソコン（カメラ・マイク内蔵もしくは別にセットしたもの）
スマートフォンでの参加もできます

◆申込期間：11 月 24 日(火)9:00～12 月 2 日(水)17:00
＊申込期間中定員に達した時点で、締切らせていただきますのでご了承ください

◆申込方法：いずれかの方法でお申込みください
1. 下記の二次元バーコード（QR コード）から　フォームからお申込み
2. 右記メールアドレスからお申込み　　ejfspj2011@gmail.com
件名に必ず「漫画トーク」係と記載してください
本文に①お名前、②年齢、③メールアドレス、④連絡先を記載

＜お問合せはこちらまで＞
立命館大学大学院人間科学研究科　震災復興支援プロジェクト　東日本・家族応援プロジェクト事務局
Email：ejfspj2011@gmail.com

主催・立命館大学大学院人間科学研究科　共催：特定非営利活動法人 ビーンズふくしま
協力：有限会社極久里珈琲

東日本・家族応援プロジェクト2020 in ふくしま　リモート

団士郎家族漫画展の詳細は別紙チラシをご覧ください

毎年、子どもたちと一緒にクリスマスカレンダーを作ったり、おもちゃで遊んだり、みなさまとお会いできることをとても楽しみにしておりましたが、コロナ感染拡大防止のため寄せていただくことが出来ません。

今年は団士郎家族漫画展につきましては、福島市にある極久里珈琲福島店で開催いたします！

団士郎漫画トークなどのプログラムにつきましては、オンライン配信で開催します。ぜひご参加ください。来年は、みなさまとご一緒にプロジェクトができることを願っています。

12/3（木）19時15分～20時45分
震災10年を経て

語り手：市澤秀耕氏＋市澤美由紀氏（極久里珈琲）

概　要：飯舘村に極久里珈琲を開店して19年が過ぎたところでの原発事故。全村避難で休業を余儀なくされたが、2011年7月には福島市の仮店舗で営業を再開、2015年福島店を本格オープンさせた市澤ご夫妻に10年を振り返っての今の気持ちをお話いただきます。

12/5（土）　10時30分～12時
団士郎漫画トーク

語り手：団士郎氏（立命館大学客員教授）

概　要：団士郎氏による「木陰の物語」にまつわるお話です。
申込方法など詳細につきましては、別紙チラシをご覧ください。

12/5（土）　13時～14時30分
被災者支援9年のあゆみと残された課題

語り手：中鉢博之氏（特定非営利活動法人ビーンズふくしま常務理事　事務局長）
小磯厚子氏（白河市つどいの広場事業　おひさまひろば副代表）

概　要：東日本大震災・原発事故による避難者は、復興公営住宅への移転、仮設住宅供与期間の終了、避難指示解除による帰還など、再び生活環境が変化している今、見えてきている課題などについてお聞きします。これまでのプロジェクトを振り返り、今後のあり方について考えます。

12/6(日)　10時30分～12時
双葉を追われて

語り手：目黒とみ子氏（宮城民話の会/原子力災害伝承館語り部）
聞き手：村本邦子（立命館大学）

概　要：原発事故により故郷双葉町を追われ、自らも八か所にわたる転居を余儀なくされながら、聴き取りによって『わたしたちの証言集：双葉町を襲った放射能からのがれて』を発刊された目黒とみ子氏に双葉町に伝わる民話と被災体験をお聞きします。

12/6(日)　13時～14時
福島第一原発事故に関する伝承施設の展示内容の特徴

講師：後藤忍氏（福島大学准教授）

概要：『みんなで学ぶ放射線副読本』を作成し、チェルノブイリ博物館やコミュタン福島などを比較研究し批判的発言をしてこられた後藤忍氏から、9月にオープンしたばかりの福島県東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れ、その展示内容を分析した結果について最新のお話をお聞きします。

12/6(日)　14時30分～16時
フクシマと グローバルヒバクシャをつなぐ

講師：藍原寛子氏（フリージャーナリスト）

概要：福島出身のフリージャーナリストとして国内外の取材を続けてこられた藍原寛子氏から、広島、長崎、フランス、イギリス、マーシャル諸島、フィリピン、ベトナム、スリーマイルなどたくさんの地を訪れ、グローバルヒバクシャと対話を続けてきた経験をお聞きし、「連帯の公共圏」を広げていく可能性について共に考えます。

主催・立命館大学大学院人間科学研究科
共催：特定非営利活動法人 ビーンズふくしま
協力：有限会社極久里珈琲